

ぼうと後に明りがさして兵士の1人が燭臺をもつて這入つて來た良兼はすぐそれを取つて壁に掛けた「北斗七星妙見菩薩」の前に供へた。墨のにちみと布のほつけが見えるその前で懐紙を出して左手に持ちかえた。侍臣が矢立を差出した時弟もその前へ坐つた。

外庭には處々に篝火がもえて唄聲はまだ聞えてゐた。

後 記

月星の紋及七曜九曜（挿圖参照）の紋章は平民良文の流。千葉氏及其の一族の家紋である。そして千葉氏の妙見信仰は前述の良兼、良文兄弟より初まるもので千葉氏の轉住と共にこの妙見信仰はその地の人々にも移信せられ崇敬の念は祠堂として残された所もあつた事は千葉傳考記に見える。その型式は信仰に於てなされたとしても幾代も續いて多くの人に星辰への關心を與へた事は是非は別として天文普及の或る一面と見る事が出來よう。

本文の年代、人物及其の妙見信仰については史書に據る事實なるも、戦争状態は筆者の構想である。 (昭和13年9月7日)

編輯室より 九月末、元氣よく山本主筆も歸つて來られました。本誌も丁度此の號から筆を新らたにして第19卷に踏み出します。非常時局の折からではありますが、宇宙の存する限り、星と人のつながりは變らないのですから、本誌も讀者と共に益々健全に發達させたいと思ひます。本號は山本主筆がストックホルムから持ち歸られた材料を特に多く盛つて、寫眞も記事も、一見特輯號の觀があり、他に先んじて、最も確かな、又、生々しい學界の新消息を讀者に贈るわけです。従つて、多少の重複を避けるため、主筆の海外日誌の續きは次號にゆづります。藤波理學士の文は讀者に多くの新しい興味を起させるものと信じます。今後も相變らず一般會員からの趣味ある原稿を歓迎します。黄紙に4號で組んだ通俗文は、昨年以來本誌の呼びものとなつて、多くの讀者を惹きつけてゐますが、之れは之れだけで、集めて別冊に製本でも出来るやう、ページ數も別に付けてありますし、又暫くは、卷が改まつても、連續したページ數を押して行くつもりです。(A. B. C.)